

Title	社会学の課題としての概念の分析：「構築主義批判・以後」によせて
Sub Title	
Author	浦野, 茂(Urano, Shigeru)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2008
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.13 (2008.) ,p.47- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 構築主義批判・以後
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会学の課題としての概念の分析

—「構築主義批判・以後」によせて—

浦野 茂

1. 中傷効果

「中傷効果(poison-pen effect)」とは、G. ライルによる概念である(Ryle, 1954: 72=1997: 118)。一言でいえばそれは、科学的・専門的概念と日常的概念との関係についての誤解から生じる混乱の経験のことを指している。そして私見では、とりわけ社会構築主義にみられる社会学的な説明の問題点もこの中傷効果と無関係ではない。それどころかむしろ、社会構築主義はこの効果を積極的に援用してきたと言えるし、だからこそ中傷効果にまつわる混乱から免れることもできないと思われる。そこでまず、ライルによる議論に耳を傾けておきたい。

ライルが中傷効果を論じているのは、科学的・専門的概念と日常的概念との間で生じうる紛糾に触れるなかにおいてである。この紛糾は、たとえば、神経生理学の理論的概念による説明と日常的概念による記述をめぐっても生じうる。

見るということがどのようなことかをすでに私たちはこの概念を用いて把握している。「スーパー・マーケットでかれを見た」とか「守衛は侵入者を見落とした」といった発言やそこで意味されている事柄は、些細かもしれないが私たちの生活の一部を形づくっている。言いかえると、私たちは、他のさまざまな概念とともに「見る」という概念を用いながら生活を行っている。他方、神経生理学の理論的説明によると、見ることは刺激に対する神経系の一連の反応プロセスの結果であると説明される。そしてこうした説明を、見るということそのものについての説明として受けとることもありえないことではない。つまり、見るということはすなわち神経系の一連のプロセスのことである、と。

このようなとき、見るという同一の事柄について、二つの対立する記述が存在しているかのように思われてくる。上の発言によれば、見るということは自分の外の世界について生じている事柄についての主張をなしている。ところが他方、もうひとつの説明にもとづけば、こうした主張がなかったかのごとく、見ることは身体の内側で生じている出来事やプロセスへと繰り込まれていく。先の発言において世界についてある主張をしているつもりだったが、じつはそれは身体の内側で生じている事柄にすぎなかったのだ、というように。そしてまた、仮にいずれの記述も見るというまさに同一の事柄について同じように述べているのだとすれば、いずれかが真であり他方が偽であるに違いないということにもなるだろう。

したがってこうした紛糾にもとづけば、日常的な概念による把握が誤っているかのようにも

思えてくるかもしれない。実際、理論的説明に用いられる概念は、それぞれが高度な技術との関わりの中かで公式に関連づけられて成立している。またその説明によれば、さまざまな事象をきわめて高い一般性において記述できる。こうしたわけで、日常的な概念によって把握されたこの世界はじつは「ダミー世界」であり、最終的には科学の理論的概念によってなされる記述へと置き換えられるべきものであるかのようにも思えてくる。

中傷効果とは具体的にはこうした経験を指すものである。もちろんここで取り上げた経験について、その混乱を指摘することはたやすいだろう。しかしそれがどの点においてどのように混乱しているかについては、いくぶん注意が必要である。ここでの例について容易にその混乱を見抜けたとしても、別の文脈において、類似した混乱にみずから積極的に荷担しているなどということもありえないことではないからである。

ライルによると、こうした混乱はカテゴリー錯誤から生じている。カテゴリー錯誤とは、概念およびその概念を含んだ記述の論理や機能についての取り違えのことである。「スペードのカード」と、カードゲームのブリッジにおける手札の状態のひとつである「シングルトン」とは、ともにカードについて述べたものであるにせよ、明らかに異なるカテゴリーに属す概念である。言いかえれば、それらに与えられている論理的な位置づけは異なっている。にもかかわらずある一枚のカードそのものを指してそれがシングルトンかどうかなどと問うことは、こうした論理的な位置づけの差異をもみ消すというカテゴリー錯誤を犯していることになる。そして見ることにについていえば、こうした取り違えは二つの点において生じていると思われる。

第一は、見るという日常的概念についての錯誤である。「見る」という概念は、外的な事柄についての正しさを含意している。たとえば「スーパー・マーケットでかれを見た」という発言は、外的な事柄についての正しさの主張をともなっており、発言者の身体状態（あるいは意識状態）について述べたものではけっしてない。そしてこの正しさは、身体内（あるいは意識内）のいかなる状態やプロセスを探したとしても得ることはできない。このように見るという概念は、痛みや痒みを感じるなど身体状態やプロセスに関する概念とは異なった論理的な位置づけをもっている。言いかえれば、知覚の概念は感覚の概念とは異なるカテゴリーとして実際に用いられているのである。

それにもかかわらずこの差異がもみ消されるとき、両者はともに身体の内的状態やプロセスを述べたものとして混同されることになる。そしてこうした混同が神経生理学的説明の形をとってなされるとき、第二の錯誤が関わってくる。この錯誤は、日常的概念を用いた記述と理論的概念を用いた記述についての混同である。一方において、私たちは見るという概念を用いて外的な事柄を把握し、またそれについて発言をおこなっている。他方、第一の錯誤においてなされている理論的説明は、実際には見るということについてしかもカテゴリー錯誤を犯しながら説明しているのである¹⁾。たしかに両者をともに「言語活動」あるいは「言語使用」の例であると述べることは可能であるし、ときにそれは避けられないことかもしれない。しかし、両者が実際には異なるカテゴリーに属す活動をおこなっていることには留意しておかなければな

らない²⁾。それにもかかわらずこうした差異への注意が失われてしまうとき、両者は、見るというまさに同一の事柄についての競合する説明であるかのように扱われることになる。日常的概念によって把握されたこの世界が「ダミー世界」であるかのように思われてくるのは、こうした紛糾の結果なのである。

2. 自明性の相対化・社会構築主義

見ることは身体の内側における状態やプロセスそのものではない。私たちは、一定の身体的状態やプロセスの説明によってはじめて見るということがいかなることかを教えられたわけではないし、この概念を用いて発言をおこなう仕方を教えられたわけでもない。つまり見るという概念を用いる方法、言いかえればこの概念を含んだ記述の論理や機能は、身体的プロセスの説明によっては与えられないのである。もちろんだからといって、見ることに多少とも関わる身体的状態やプロセスについての神経生理学的説明を端から拒否する必要もない³⁾。必要となるのは、それぞれの権利と義務の境界線に留意しておくことである。すなわち、理論的説明は、すでに見るという概念を用いておこなうさまざまな実践が現に存在しているということそしてその論理を踏まえたとえ、はじめて妥当性をもつのでありまたそうでなければならない、ということである。

この点は、とりわけ人間とその社会生活についての科学的説明を目指す社会学にとって重要な意味をもっている。なぜなら、こうした境界線があやまって踏み越えられてしまうとき、この科学にとって説明すべき当の事態や現象そのものがダミーとして抹消されてしまうことになるからである。そして社会構築主義における自明性の相対化の操作とは、こうしたダミー化の操作のひとつではないかと考えることもできる。言いかえれば、自明性の相対化とは中傷効果を自覚的に生じさせることであり、したがって社会学がほんらい説明すべき事態や現象をダミーとして抹消させていく操作なのではないかということである。そして仮にその通りだとすれば、このプログラムには一連のカテゴリー錯誤が存在しているはずである。以下ではこの点を検討していってみよう⁴⁾。

I. ハッキングが指摘しているように、広義の社会構築主義的議論に共通する眼目は、自明な観念や概念そしてまた対象が実際には社会情勢の偶然的な産物、すなわち構築物であることを明らかにする点にある (Hacking, 1999: 12=2006: 27) ⁵⁾。つまりなんらかの自明性を前提にしなければ、構築という概念にはなんの眼目もない。たとえば「人種の社会的構築」を論じることとは、人種という観念やその観念にもとづく対象として人種集団が自明視されているからこそ、意味をなす (Appiah, 1996)。同じことは社会問題についてもあてはまる。任意の社会問題の存在が一部の社会学者自身を含めて一般に自明にされているからこそ、それがクレーム申し立て活動という言語活動によって構築されるものであることを指摘することも意味をなすのである (Specter & Kitsuse, 1977=1990)。

さてそのうえで注意しておきたいのは、こうした自明性の相対化が可能となるための論理的

条件である。自明性の相対化がなされうる以上は、構築主義の議論が、自明なものの見方と同一の前提に立ちつつそれに対置される形で、提示されているはずである。言いかえれば、異なる知見を提供すること以上の強い含意がそこに存在していなければならない。自明性を相対化するとは、ある同一の前提に立ったうえで紛糾を自覚的に作り出すことを通じて成し遂げられる事柄なのである。では、それはどのような前提なのだろうか。

一言でいえばそれは、社会生活についての認識という前提である。すなわち日常的知識と理論的知識とが、それぞれをともに社会生活についての認識とみなす同一の前提のうに位置づけられているのである。だからこそ構築主義的議論は、この両者に紛糾をもたらし、ひいては自明な認識としての日常的知識を相対化することを目指すことができるのである—実際にそれが成功を収めるかどうかはともかく、このプログラムの眼目が意味をなすのは、こうした前提の上においてなのである。

ここからは、日常的知識と理論的知識とが、常識的認識と科学的認識の対比として概念化されていることがわかる。そしてこのような対比は、具体的にはさまざまな形をとって社会学のなかに現れているように思われる。非論理的な常識と論理的な科学的認識、素人の理論と専門家の理論、実践的関心と理論的関心……。こう敷衍してみると、こうした対比およびそれにもとづく自明性の相対化の操作は構築主義の専売特許ではないと言えるだろう。まただからこそ、こうした対比にことさらに目くじらを立てる必要もないように思われるかもしれない。

しかし、自明性の相対化が中傷効果であるというこれまでの見方が正しければ、やはりここにもカテゴリー錯誤が存在していると考えなければならないだろう。そしてその錯誤を一言で言えば、日常的知識を社会生活についての認識として扱うこと、したがってまた社会学者とその対象者とがともに社会生活を認識するという同一の活動に携わっているものとみなすことである。これが構築主義にそなわるカテゴリー錯誤である。あえてそれを表現すれば、認知主義というカテゴリー錯誤ということになるだろう。

たしかに日常的知識は、社会学的認識から判断する限り、誤謬や不正確さを含んでいるようにみえるかもしれない。しかしこのようにみえるのは、あくまでも両者の知識が同一の前提、すなわちともに社会生活についての認識であるという前提のもとに捉えられる限りにおいてである。言いかえれば日常的知識は、それが社会生活についての内容的知識 (knowing that) として概念化されるとき、そしてそのときに限り、社会学的認識と競合しかつそれとの対比において誤謬や不正確さを含んだものとして扱われることになるのである。しかし、日常的知識を社会生活についての内容的知識として概念化することは、ただちに首肯できる事柄ではない。

少なくとも社会生活にかかわるなんらかの事柄について説明する内容的知識が可能であるためには、この事柄が意味のあるものとして前もって成立していなければならない。たとえば、見ることに関連する身体状態やプロセスについて説明する内容的知識が成立しうるためには、見るということがどのようなことであるのかが前もってわかっているものでなければならない。そして見るということがどのようなことであるかを決定するのは、この内容的知識ではなく、

見るという概念を用いるその仕方、すなわち方法的知識 (knowing how) である (Ryle, 1949: 27ff. =1987: 27ff.)。これと同様、社会生活の一局面についての内容的知識が得られるためには、それに先だって概念を用いてこの局面じたいを意味のある仕方で形づくっている方法的知識がなければならない。そして日常的知識とは、こうした方法的知識として概念化されるべきなのである⁶⁾。ここでもやはり、日常的知識と理論的知識との権利と義務の境界線に留意しておくことが必要である。言いかえれば、社会生活についての理論的説明は、すでに当の社会生活が一連の概念の使用とともに意味あるものとして存在しているということ、そしてその論理を前提にした上で、はじめて妥当性をもつのでありまたそうでなければならないのである。

この点から考えると、日常的知識を社会生活についての内容的知識として、したがって一種の理論として概念化してしまうことは、カテゴリー錯誤、しかも社会生活の内実をダミーとして消失させてしまう錯誤を犯している。そして自明性の相対化という構築主義のプログラムの眼目も、じつは知識についてのこのようなカテゴリー錯誤のうえに成立していると考えられるのである。

3. 語りという言語活動

日常的知識と理論的知識との関係についての以上のような整理は、J. I. キツセらの構築主義のプログラムとよく似たもののようにみえるかもしれない (Specter & Kitsuse, 1977=1990; Ibara & Kitsuse, 1993=2000)。かれらは実際、社会成員の視点と社会学研究者の視点 (あるいは社会学者がほんらい採るべき視点) とを区別している。社会成員の視点からすると、任意の社会問題が存在することは自明である。社会成員はただそれを日常的概念によりながら語り、評価し、クレームをおこなっているにすぎない。他方、社会学研究者の視点は、社会成員によるこうした言語活動こそが当の社会問題を構築するものとして分析していくことになる。

しかしここでも、依然として認識論レベルでの競合が想定されている。たしかに、社会成員による社会問題の概念の使用を、科学的な社会問題概念にもとづいて矯正していくような、R. K. マートン流の中傷効果は避けられている。しかし他方においてこのプログラムは、日常的知識を用いた社会成員の視点に社会問題についての實在論的立場 (「日常世界の存在論」) を帰属しつつ、それが実際には社会成員の言語活動によって構築されるものであるとみなす社会学研究者の視点を対置していく (Ibara & Kitsuse, 1993: 29=2000: 53)。ここでは、日常的知識は一種の哲学的理論として扱われており、したがって日常的知識と理論的知識とが競合関係におかれることになる。こうした操作を通じて、このプログラムは一種のダミー効果として自明性の相対化をもたらすことができるようになっているのである。しかし、社会成員の視点あるいは日常的知識に対して、哲学における實在論になぞらえた認識論的立場を帰属するのは、本末転倒なカテゴリー錯誤である。

まず第一に、社会成員はその社会生活のなかで哲学的議論をおこなっているわけではない。したがって事物や事象のあり方を普遍的に論じる理論的立場をあたかも社会成員に帰属するこ

とができるかのようにみなすことは、仮にそれが隠喩的表現だとしても、こうした差異をもみ消すカテゴリー錯誤を犯していると言わざるをえない。すなわち、日常的知識を社会生活についての認識とみなし、したがって理論的知識とあたかも競合するものであるかのように概念化することの錯誤である。

第二に、そもそも「実在」や「実在する」といった概念に意味があるとするならば、それはどのようにしてなのか、という問題についても考えておかなければならない。たしかに私たちはこうした概念を含んだ発言を社会生活のなかで意味ある形で行っている。そしてもしそうだとすれば、その有意味性は、なんらかの哲学的理論や社会学的理論によって保証されているがゆえではなく、こうした概念とそれを含んだ発言が一定の社会的状況のなかで果たしている論理と機能ゆえに得られているはずである。そして J. L. オースティンによる検討にもとづくならば、「実在」に関連する一連の概念は、「否定主導語 (trouser-word)」として、すなわち具体的な社会状況のなかにおいてそのつど任意の事象を本当ではない (not real) あり方として否定する機能をもっている (Austin, 1962: 70f.=1984: 105f.)⁷⁾。したがってこれらの概念を、それらが用いられている具体的社会状況から離れてなんらかの共通の性質を意味するものとして考えること—「日常世界の存在論」を社会成員に帰属することができる以上はそれを行っているはずである—も、これらの概念についてのカテゴリー錯誤を犯していると言わざるをえない。すなわち、実在に関連する一連の概念およびこれらの概念を含んだ記述の論理や機能についての取り違いである。

もちろんこうした二つのカテゴリー錯誤は、前節で触れたカテゴリー錯誤と表裏一体のものであり、ともにこのプログラムの根幹にそなわる概念的混乱を示している。しかしまたこの混乱は、その方法論において鍵となる諸概念にも影を落としている。この点は、言語活動の概念とこの概念に与えられた役割において確認できる。

たとえばイバラとキツセは、「「[社会の] 状態」の特定の性格は、それが記号のネットワークすなわち言語のなかでの位置づけの問題として理解」されるべきだと述べている (Ibara & Kitsuse, 1993: 33=2000: 61)⁸⁾。もちろんこうした表現を、実在するものはすべて言語のなかにあるというような言語的観念論を主張したものと受け止めることはできないだろう (Hacking, 1999: 24=2006: 55)。視覚の対象が身体の中にあるなどと言うことが意味をなさないのと同様、社会問題が言語の中に存在しているなどと言うことも意味をなさないからである。とはいえこの点を割り引いたとしても、この引用部からは、社会生活（およびその一局面としての社会問題）を言語へと還元していく進み方を読み取ることはできるだろう。

実際、このプログラムにおけるデータとなるのは、社会成員が任意の社会状態について行う語りである。言語が重要となるのは、任意の状態について語ることがすなわち「言及の対象」として社会問題を構築するとみなされているためであり、その限りにおいてなのである (Ibara & Kitsuse, 1993: 33=2000: 61)。ここでは、一方において社会成員の行う言語活動を語ることへと切り詰めつつ、他方でこの切り詰められた言語活動へと社会問題またさらには社会生活全般

を還元していくことがなされている。

こうした還元の操作は、先にみたカテゴリー錯誤の正確な対応物である。先にみたように、日常的知識は社会生活についての内容的知識として概念化されていた。この前提にもとづいて社会成員の言語活動を捉えようとするならば、焦点はおのずと内容的知識としての言語に向かうことになるだろう。実際には、語りや物語あるいは言説といった単語が用いられてはいるものの、このプログラムの下では、それらはいずれも内容的知識として捉えられた限りでの言語を指していることに変わりはない⁹⁾。そしてこのように言語活動を内容的知識として捉えることにもとづいて、日常的知識と理論的知識との競合および自明性の相対化という操作が行われているのである¹⁰⁾。

4. 人工物としての語りえないもの

このように言語へと社会生活を還元していく試みに対して、非言語的事象の存在を指摘することによる批判がしばしばなされてきた。言語によらない活動や経験、あるいは言明することの困難な経験などが指摘され、構築主義がこうした事象を適切に捉えることはできないとの批判である。一見するとこうした批判は極めてもつともなものである。とはいえしかし、こうした非言語的事象という概念とこの概念に依拠した批判もまた、このプログラムと同じ前提のうえに成立している点に注意すべきだろう。つまりここでの非言語的事象における言語とは、依然として語り、すなわち内容的知識という前提において捉えられた限りでの言語なのである。したがってこうした批判が有効かつ重要なものと見えるのは、言語を内容的知識として捉えていく構築主義と同じ枠組のなかにおいてであり、その限りでのことなのである。

この点を見るために、記憶を物語 (narrative) として概念化する視点とそれへの批判をめぐるなされているハッキングの議論を参照したい (Hacking, 1995: chap. 17)。そこでは、記憶というやはり社会生活の一部をなす現象に即しつつ、社会生活を言語へと還元していく試みとそれへの批判とがともに誤った前提の上に成立している点が示されている。

記憶を物語として概念化したうえでその過程の性質を把握していく視点は、社会心理学における構築主義においてしばしば見られるアプローチである (Edwards, 1997)。ちなみにこうした視点は、人間の精神および魂を記憶として解明していくという同じ前提に立ちながらも、記憶を神経系の一連のプロセスとして把握していく神経学的視点へのアンチ・テーゼとして提示されてきた経緯をもっている。したがって神経学的把握と同様、記憶を物語とみなす視点も、記憶を物語というやはり対象化することができる活動のプロセスへと還元していく試みなのである。ただし、物語との同一視ゆえに記憶は神経学的に把握されるのとは異なった特徴、すなわち再構成や省略、脚色に満ちているという特徴を帯びることになる。この結果、こうした記憶からは過去についての知識としての真正性が奪われていくことになる¹¹⁾。

他方、このように記憶が捉えられるとき、またそれとの対比において、フラッシュバックという非物語的な記憶が過去の知識にとっての特権的源泉として現れてくることになる。外傷的

経験をもたらせた光景が突如として強い感情とともに現れ出てくるフラッシュバックは、その生々しさゆえに物語化することのできない記憶—「ことばを持たない凍りついた記憶」(Herman, 1992=1996: 53)—とされる。この点ゆえにこの記憶は、過去の再構成を免れている、すなわちこの記憶は、過去の知識の源泉として特権的な真正性を持っており、またこの記憶の持ち主は過去の真実を具現する者とみなされていくことになる。しかし、フラッシュバックに付与されたこうした真正性は人工物である。すなわち、記憶を物語という一定のプロセスをそなえた活動と同一視するという前提があるからこそはじめて、フラッシュバックに過去の知識の源泉としての真正性が認められているにすぎないのである¹²⁾。

ハッキングが見るところ、問題のそもそもの源泉は記憶をなんらかのプロセスと同一視するところにある。そもそも記憶は、神経系のプロセスそのもののことではない。しかしだからといって、物語という作業活動そのものでもないし、また同様にフラッシュバックと呼ばれる心的経験そのものでもない。この点は、記憶に関わる概念の用法をかえりみれば容易にわかるだろう。

記憶とは、知覚と同様、正しさを含意している。たとえば「かれはXを思い出した」と述べることは、Xについてかれが正しく思い出したということ、とりわけこの正しさが一定の状況において成し遂げられたということを意味している。記憶とは、過去に源泉をもつ事柄についての正しさが成し遂げられたという事態を意味しているのであって、この事態に至るためになされた作業活動やそれに伴うプロセスを意味しているのではない。ライルの言葉によれば、記憶とは達成に関わる概念であって、作業やプロセスに関わる概念とは異なるカテゴリーに属しているのである (Ryle, 1949: 272ff.=1987: 399ff.)¹³⁾。

したがって、記憶を内的（身体的あるいは心理的）なものにせよ外的なものにせよ、なんらかのプロセスへと還元しこれと同一視することは、「論理的誤謬」である(Hacking, 1995: 253)。そしてこの点は、記憶を神経系のプロセスや物語と同一視する視点に限ったことなく、フラッシュバックと同一視する視点にしても同様である。たとえそこに強い感情と容易に物語化しえない特徴がそなわっているとはいえ、この経験そのものを記憶とすることはやはり記憶をプロセスへと還元するという同じ誤謬を犯している。実際のところ、この経験が過去の知識の源泉として物語とは別種の真正性を持つかのように見なされるのは、あくまでも記憶を物語へと還元する視点と受け入れた上で、なおかつそれとの対比においてなのである。

語りえないものという非言語的事象をもって構築主義に対してなされてきた批判についても、これと同様に考えることができるだろう。仮に語りえないものの存在がとりわけ重視され、またそこに構築主義に対する批判的意義があるかのようにみえたとしても、そのような意義は批判対象がもたらせた人工物なのである。構築主義が内容的知識として概念化された言語へと社会生活を還元する試みであるとすれば、それへの批判として提示される語りえないものもやはり内容的知識として概念化された限りでの言語ならざるものであるにすぎない。したがって両者はともに、社会成員の知識を内容的知識として概念化した上でそれへと社会生活を還元して

いこうとする前提の上にある。そしてこのような概念化が論理的に誤っていることは、これまで示してきたとおりである。すなわち、社会成員の知識を社会生活についての内容的知識として捉えてしまうという認知主義の誤謬を犯しているである。

したがって「構築主義批判・以後」を展望するにあたって必要となるのは、このような非言語的事象の問題を理論的に克服することでもないし、またこの問題にもとづいて構築主義を乗り越えていくことでもない。なぜならいずれの進み方も、ともに認知主義の誤謬を犯している点において相違ないからである。むしろ必要となるのは、この認知主義の前提から離れること、すなわち社会成員の知識を内容的知識として概念化することじたいを拒否することだろう。そして社会成員の知識を方法的知識の水準で捉えていくことが、そのための進み方のひとつとしてありうるはずである。

これまでに触れてきた例においてすでに述べてきたように、私たちの社会生活は、私たちが持っている概念と切り離しがたく結びついている。人間の活動やそのなかで成立する事態は、その人間が持っている概念ぬきにはそもそも存在しえない。ある活動や事態とは、まさにこれらの活動や事態に関わる概念を論理的に使用していくこととして、存在しているのである。したがってこれらの概念がいかなる論理で使用されており、またそこでいかなる機能を果たしているのかを記述すること、すなわち概念使用の方法的知識の記述とは、こうした活動や事態そのものの—したがって社会生活そのものの—記述なのである(Winch, 1958=1977)。

このような記述は、けっして言語の研究ではないし、社会生活を言語へと還元することとも異なる。概念の使用を記述するとは、概念がいかなる社会的状況を条件とし、かつその状況のなかでいかなる機能を果たすものとして用いられているかを、記述していくことだからである。したがって、概念を記述していくことは、言葉だけをたんにみていくことにとどまるわけではけっしてない。オースティンにしたがって言えば、言葉についての気づきを研ぎ澄ますこととはすなわち、現象そのもの—すなわち社会生活そのもの—についての知覚を研ぎ澄ますことなのである(Austin, 1970: 182=1991: 289f.)。

5. 社会学の課題としての概念の分析

ライルの『ジレンマ』は、科学や法律などの専門的概念と日常的概念との干渉として生じた中傷効果を、それぞれの概念が用いられる論理とそれが果たす機能を明確化することを通じて解きほぐしていく試みである。これまでに参照してきた事例とその対処の仕方は、すでにこの書の出版から50年以上も経過していることもあって、なかば当たり前のものとなってしまうとも言えるかもしれない。しかし重要なのは、もちろんこの事例そのものではない。高度に専門分化した社会生活の様々な局面のなかで、私たちはこの事例にも見いだされるような様々な干渉を経験しながら生きていかざるをえないはずである。

実際にライルは次のように述べている。専門的概念と日常的概念とは、必ずしもそれぞれが形式的に組織されたまとまりをなしているわけではなく、ただ曖昧な境界によって隔てられて

いるだけのこともしばしばである (Ryle, 1954: 33f.=1997: 55)。あるいは、理論や法体系ならびにこれらに依拠した活動が大きく変動していくなかで、それまでの一連の諸概念の用法が組み替えられることを通して、概念の使用に混乱をきたすこともありうるという (Ryle, 1954: 127f.=1997: 209f.)。そして仮にその通りだとすれば、このような干渉の経験に耳を澄ませつつそれに導かれながら、こうした経験を構成している一連の諸概念の論理とそれらの関係を分析し、またそれぞれの権利と義務を明確にしていくという進み方をこそ、この書から学び取っていくべきなのだろう。

これまで述べてきたように、概念を用いることとして私たちの社会生活が形づくられている。したがって日常的な概念および専門的概念の使用とその連関はもとより、これらの間で生じうる干渉と混乱じたいもまた、私たちの社会生活の一部をなしているはずである。このようなわけで、相異なる概念群の概念にそれぞれもとづいた把握や言明の間にそなわる連関や、それらの間の共通性と差異性を解明していくという概念分析の試みは、社会学にとっても積極的に取り組むべきひとつの課題であると思われる(Ryle, 1954: 129=1997: 212)¹⁴⁾¹⁵⁾。

【注】

- 1) ただし見ることについて説明するのは科学者に限らず、一般になされていることでもある。したがっていずれの場合であれ、概念を用いることとその概念について説明することとの間にある差異がもみ消されるとき、第二の錯誤が生じているというべきである。ちなみにこの論点は、H. ガーフィンケルとH. サックスによって、定式化についての議論のなかで明確にされている (Garfinkel & Sacks, [1972]1986)。
- 2) のちにみるように社会構築主義においては、「言語活動」や「言語使用」、「言説」といった一連の活動に関する基礎的用語が、ここでみたような差異をもみ消す役割を果たしているように思われる。
- 3) とはいえ、見るということは正しく見るということであり、ライルの言葉で言えば達成に関わる概念であって、作業やプロセスに関わる概念ではない(Ryle, 1949: 272ff.=1987: 399ff.)。よってプロセスに関する説明が妥当であるためには、少なくともこの相違が踏まえられていなければならない。
- 4) シンポジウムにおいて、奥村氏が自明性の相対化の問題について、本稿のような概念的問題としてではなく、むしろ社会変容の問題として論じられていた。この視点はまた奥村 (2008) でも明らかにされている。本稿はこの点について異議を唱えるものではない。しかし社会変容の問題とは別に、またそうした問題が現れる条件として、自明性の相対化を目指す議論にすでに含まれている概念上の問題に、本稿は注目するものである。また、感情についての構築主義的議論が実際の感情を裏切ってきたという岡原氏の指摘も、こうした文脈に引きつけて理解することができると思われる(岡原, 1998: 2)。たとえばある事象を怒りという感情として日常的に理解できることと、感情の生理的もしくは文化的な発生メカニズムを説明することとは、全く別カテゴリーに属す事象である。にもかかわらずこうした差異がもみ消されるとき、感情社会学による感情の「裏切り」が生じていると捉えることができるのではないかと思われる。

- 5) 以下、省略して構築主義とする。なお、本稿では構築主義の内包と外延を厳密に定義することなく論じている。その理由は、ハッキングに倣い、構築主義をその議論の眼目にもとづいて捉えるためである(Hacking, 1999: 5=2006: 12)。そのため本稿の焦点となるのは、構築主義という看板を掲げているかどうかにはかわりなく、構築主義的議論の進み方の問題となる。
- 6) ここで日常会話における共通理解についてのガーフィンケルによる観察を思い浮かべてもよいだろう(Garfinkel, 1967: 24f.)。この観察から彼が最終的に得たのは、コミュニケーション参加者が用いている知識が理論的知識に照らして省略的であるということでもなければ、両者が機能するさいの関心の相違でもない。むしろ内容的知識とはそもそも別のカテゴリーに属すものとして、したがって理論的知識と競合することもありえないものとして、この知識を捉えていく進み方である。そしてエスノメソドロジーとは、このように把握される知識のことを指している。
- 7) なお、こうした視点を実験室というやはりひとつの社会状況のなかで追求していったものとしてLynch(1985)がある。
- 8) 訳語はその一部をあらためた。
- 9) したがってこのプログラムにおいては、私たちが語りや物語の概念を用いながら社会生活を作り上げていくその仕方(方法的知識)が問われることはない。すなわち語ることや物語ることがいかなることかといった事柄は自明の前提であり、そのうえで機能や特徴についての操作的な定義を加えていくことによって語りや物語の内容的側面に焦点が当てられていくことになる。この点は、物語の認識可能性を解明の対象として行われていたサックスの進み方と、対照されるべきだろう(Sacks, 1992: II: 222ff.)。この物語の認識可能性とは物語の概念の適用の可能性のことであり、つまりは物語の概念の用法のことである。そしてサックスによる物語についての研究は、このような物語の概念が適用される実践的条件とこの概念の実践上の機能(概念の適用にともなう実践上の含意)を中心にして組織されている。
- 10) このように理論的知識と日常的知識がカテゴリー錯誤によって同じ活動を行うものとして捉えられるからこそ、日常的知識に対する分析的態度を理論的知識じたいにも反射的に適用するという立場も成立することにもなる(Woolgar & Pawlutch, 1985; Pollner, 1993)。こうした立場とその前提となっている錯誤は、言葉を用いて行う多様な活動の差異を、認識に関わるものとして概念化された「言語活動」という一般的用語のもとでもみ消してしまう結果として、生じているのである。
- 11) 実際に、Loftus & Ketcham(1994=2000)はこの点を衝くことによって、多重人格障害に対してなされていた記憶回復療法を批判していくことになる。この点についてはまた、浦野(2007)を参照してほしい。
- 12) ただしこのように述べることと、現にトラウマに苦しむ人びとに対するたとえばJ. ハーマンにみられるような理論的および実践的な取り組みじたいを正当に評価することとは、区別して考えるべきである。
- 13) この点については、浦野(1999)を参照してほしい。
- 14) そして「ループ効果(looping effect)」および「相互作用類(interactive kind)」というハッキングの概念は、こうした視点から日常的な概念と専門的概念との連関領域を捉えるべく提起されていると考えるこ

とができるだろう(Hacking, 1999=2006)。

- 15) 本稿での議論をまとめるにあたり、フロアにいらした方々を含めてシンポジウムに参加された方々のご意見を参考にさせていただいた。記して感謝したい。

【文献】

- Austin, J. L., 1962, *Sense and Sensibilia*, Oxford University Press. =1984, 丹治信治・守屋唱進訳『知覚の言語』勁草書房。
- , 1970, *Philosophical Papers*, 2nd ed., Oxford University Press. =1991, 坂本百大監訳『オースティン哲学論文集』勁草書房。
- Appiah, K. A., 1996, "Race, culture, identity," in Appiah, K. A. & A. Gutmann, eds., *Color Conscious*, Princeton University Press., 30-105.
- Edwards, D., 1997, *Discourse and Cognition*, Sage.
- Garfinkel, H., 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.
- Garfinkel, H. & H. Sacks, [1970]1986, "On formal structures of practical actions," Garfinkel, H., ed., *Ethnomethodological Studies of Work*, Routledge & Kegan Paul, 160-93.
- Hacking, I., 1995, *Rewriting the Soul*, Princeton University Press.
- , 1999, *The Social Construction of What?*, Harvard University Press. =2006, 出口康夫・久米暁抄訳『何が社会的に構築されるのか』岩波書店。
- Herman, J. L., 1992, *Trauma and Recovery*, Basic Books. =1996, 中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房。
- Ibara, P. R., & J. I. Kitsuse, 1993, "Vernacular constituents of moral discourse," in Holstein, J. A., & Miller, G., eds., *Reconsidering Social Constructionism*, Aldine de Gruyter, 25-58. =2000, 鮎川潤訳「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社, 46-104.
- Loftus, E. F. & K. Ketcham, 1994, *The Myth of Repressed Memories*, St. Martin's Press. =2000, 仲真紀子訳『抑圧された記憶の神話』誠信書房。
- Lynch, M., 1985, *Art and Artifact in Laboratory Science*, Routledge & Kegan Paul.
- 奥村 隆, 2008, 「学生は社会学になにを見出しているか」『社会学評論』58-4, 415-35.
- 岡原正幸, 1998『ホモ・アフェクトス』世界思想社。
- Pollner, M., 1993, "The reflexivity of constructionism and the construction of reflexivity," in Holstein, J. A., & G. Miller, eds., *Reconsidering Social Constructionism*, Aldine de Gruyter, 199-212.
- Ryle, G., 1949, *The Concept of Mind*, Hutchinson. =1987, 坂本百大・宮下治子・服部裕幸訳『心の概念』みすず書房。
- , 1954, *Dilemmas*, Cambridge University Press. =1997, 篠澤和久訳『ジレンマ』勁草書房。
- Sacks, H., 1992, *Lectures on Conversation*, 2vols., Blackwell.
- Specter, M., & J. I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Cummings Publishing. =1990, 村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築』マルジュ社。

浦野 茂, 1999 「想起の社会的コンテクスト」『現代社会理論研究』9, 109-21.

——, 2007 「記憶の科学」『哲学』117, 245-66.

Winch, P., 1958, *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, Routledge & Kegan Paul. =1977, 森川真規雄訳『社会科学の理念』新曜社.

Woolgar, S., & D. Pawluch, 1985, “Ontological gerrymandering,” *Social Problems*, 32(2), 214-27. =2000, 平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社, 18-45.

(うらの しげる 青森大学社会学部)